

Quality of life と well-being

藤 井 義 博 (藤女子大学 QOL 研究所長)

Quality of life (QOL) と well-being は、健康、生命力、幸福、創造力とともに、挫折や敗北からの復元力やしなやかさを含む生活上の積極的な経験である。このような QOL と well-being は、物質的な不足ないしは不十分な心身の機能状態からの脱却にとどまらず、人生の危機を生き抜いた結果もたらされ得る人生の変容をも含む積極的な経験である。QOL と well-being を社会レベルにおいて捉えると、それは、経済成長のみに一様に焦点を結ぶ monochrome な生活経験ではなく、経済成長を一つの指標と捉える多様な視点を内在するいわば “poly-chrome” な生活経験である。

このような多面性と多様性を特徴とする QOL と well-being は、H. A. Maslow の人間の必要性の段階的充足という成長的視点から把握することで、より明確にその構造的把握が可能になるであろう^{1),2),3)}。すなわちそれは、必要性の5つの順次的発展階層を構成するところの生理的必要性、安全の必要性、帰属の必要性、尊敬の必要性、自己実現の必要性の個人レベルにおける充足状態である。そして成長的発展階層を社会制度的発展段階として把握するならば、それは社会レベルにおける5つの階層的必要性の充足状態としても捉えることができる。

QOL と well-being の研究は、こころ、身体、社会、環境を包括する学際的なアプローチを必要とする。このような特徴をできるだけ明確に表明するために、藤女子大学福祉研究所は、名称を藤女子大学 QOL 研究所と改めた。そうすることで、quality of life と well-being が、藤女子大学人間生活学部の共通の課題であることを再確認するとともに、この研究所は、学際的な研究を実施する人間生活学部の基にある研究所であることを明確にした。

引用文献

- 1) A. H. Maslow: “Motivation and Personality”, 3rd ed, Longman, New York, 1970.
- 2) M. J. Sirgy: American Journal of Economics and Sociology, 45, pp 329-342, 1986.
- 3) 藤井義博: 栄養の多次元の必要性について, FFI Journal 209 (5), pp 404-409, 2004.